

EUにおける地域研究の問題に関する考察 ポーランドの地理的枠組みの変遷と地域特性を例に

撫養 祥幸

研究の目的と方法：

筆者は、学部において国際関係論を専攻したのであるが、その中心的課題の1つは、国際的な経済関係の形成と、そこにおける支配・従属の問題である。それは、歴史的過程を通じていくつもの段階を経て発達してきたと言える。古代ローマの帝国支配や中世の通商関係を別にしても、例えば、再版農奴制を伴った西欧と東欧の関係、大西洋三角貿易に始まる宗主国と植民地の関係、さらには計画経済におけるロシアと社会主義諸国の関係などが挙げられる。そして現在では、東南アジアのASEAN、南北アメリカの米州機構、ヨーロッパのEU、等々、いわゆる地域的な経済統合に向けた動きである。

東欧における再版農奴制は、それ自体は西欧に対する経済的従属や周辺化を意味するものではなかったが、結局は近代化の遅れの要因となって、西欧列強による分割支配を受けることとなった。宗主国と植民地の関係は、当初は、それが略奪的であったかどうかは別にして、主には貿易を中心とする関係であった。しかしその後、宗主国を中心とした植民地の周辺経済化が明確に意図され、その象徴的な出来事が、1885年のベルリン会議におけるアフリカ分割であった。また、ソヴィエト連邦においては、主権国家同士の統合ではあっても、計画経済という名の分業体制の下で、ロシアを中心とした連邦諸国の周辺化が理論的に正当化されるものであった。

一方、現在の地域経済統合は、同盟という名の下に、参加各国の主権を尊重し、相互に平等な関係を築くことが前提となっている。従って、歴史的な経済統合におけるような従属的關係や周辺化は、建前上存在しないのであり、問題視されることも少ない。本研究は、この同盟に基づく地域統合の理念を最も明確に掲げているEUを対象に、その周辺化の問題が果たして存在しないのかどうか疑問を持つことから始まっている。たとえ国同士では平等な政治的關係にあっても、人々が生業を営む地域(local)から見た場合、経済圏が大きくなればなるほど周辺化される地域が生まれてくるはずである。

本研究の目的は、真の国際関係を理解するために、そのようなローカル地域のグローバル関係を、歴史的に形成された社会構造の特徴から検討することであるが、具体的な課題は、以下の3つに絞られる。第1には、分割支配や国境の移動によって生じた地域特性を検討すること。第2には、従って、ヨーロッパの国際関係と周辺化の問題を国別で論じることはできないことを確認すること。そして第3には、そのための地域研究には、どう対処するかを考察することである。

論文の構成：

第1章 序論

1-1 ヨーロッパにおける分割支配と国境移動の歴史

1-2 EUの理念と地域政策

第2章 研究の目的と方法

2-1 EU諸国における地域研究の問題点

2-2 研究の課題と方法

第3章 ポーランドの地理的枠組みの変遷

3-1 国土3分割と国境変動

3-2 歴史的な地域区分

第4章 ポーランドの地域性

4-1 統計の選択と地域の特化係数

4-2 地域の特性とその比較

第5章 旧ロシア支配地域の農村

5-1 荘園貴族とフォルヴァルク

5-2 村の現況

第6章 結論

6-1 課題の整理

6-2 今後の課題

参考文献及び引用文献

附：国境変動の歴史

論文の概要：

本論文は、以下の6章から構成される。

第1章「序論」では、まずEU27ヶ国の近代から現代にわたる分割支配と国境移動の状況から、その領土争いの激しさを示す。その上で、EUの統合理念と、その具体策である地域振興政策について概説する。

“ヨーロッパの国境は自然に形成されたわけではなく、政治的に構築されたものである。ヨーロッパの歴史を振り返ると、国境は国民国家の形成と再形成をめぐる争いの結果とし

て線引きされてきたのであり、現在、ヨーロッパの国境のほとんどは戦争の結果として画定されている。国境は「歴史の傷跡」なのである。人々は、政治的判断による線引きの結果、分断されてきた。国境の多くは、国民国家間の暴力的紛争の結果として生じている。”

第2章「研究の目的と方法」では、上記の課題に至った理由を説明すると共に、研究の対象に、中世ではヨーロッパ最強の国でありながら、およそ120年余り、列強の分割支配によってその存在が地図上から消され、その後、ソヴィエト連邦の一員となり、さらには現在では、EUの一員となっているポーランドを取り上げる理由と、その地域特性を測る方法を述べる。

“欧州の歴史は近代以降のみをとっても、戦争により国境・領土は頻繁に塗り替えられてきた。国境変動、長い分割時代の中に、それぞれの地域は政治的・経済的に異なったパターンを発展させていったのである。従って、EU諸国において地域研究を行う場合、国単位ではなくローカル毎に統計を再編しなければならない。本研究では、ポーランドの地理的枠組みの変遷において、国土3分割の時代からの歴史を辿り、歴史的背景から見た地域区分を行う。その上で、統計データを基に、地域特化係数を算出し、地域特性を炙り出す。そして、最終的には歴史的な地域区分と特化係数に基づく地域特性を照合することにより、その関連性をみていく。”

第3章「ポーランドの地理的枠組みの変遷」では、プロイセン・ロシア・オーストリアによる分割支配の歴史と、第2次大戦による国土の東から西への「引っ越し」を踏まえたポーランドの地域区分を試みる。

“ポーランドは、プロシア・ロシア・オーストリアに分割され、一時は独立したものの再度ドイツとロシアに分割され、また第2次世界大戦後に、東の一部をロシアに奪われ、西の一部と北をドイツから奪っている。その結果、ポーランドという国自体が、西へ150Kmほど引越したことになる。そして、ロシアに奪われた領土のポーランド人が、ドイツから奪った領土に、ドイツ人の家屋と農地をそのまま利用して入植している。以上の歴史的背景から見たポーランドの地域性は大きく4つに分けられる。”

第4章「ポーランドの地域性」では、その地域区分における産業構造、所得、農地規模等から、地域性の違いを明らかにする。

“ポーランドは歴史的に分断されてきた為、現在の行政区画になるまで、何度もやり直しを行ってきた。従って、行政区分を時系列に見ることで一貫した地域特性を得ることが出来ず、最適な統計を選択する事は難しい。地域研究のためには、郡の統計を元に再集計する必要があるが、その作業には、各省庁に入り込んで1年以上かけねばならない。従って、今回、便法としてワルシャワの公的機関 **Central Statistical Office** が発行するポーランド地域の年間統計データを主として、地域の特化係数を算出し、地域特性を検証する。”

第5章「旧ロシア支配地域の農村」では、ロシア支配が故に、ポーランド王国の時代のフォルヴァルクの影響が、社会主義時代から現在に至るまで尾を引くヤブロン村での知見を述べる。

“事例研究を行った Jabłoń (ヤブロン) 村もこのような貴族とフォルヴァルクによって特徴づけられる村の典型的な1つである。村の3分の1がフォルヴァルクの一部で、そこに属するヨスカは農奴的な農民と小作農よりなる。写真5-1に示されるような貴族の館は、ポーランドB地域の各村に今でも残るものであり、ヤブロンだけが例外ではない。2011年8月12日～19日にかけて筆者はポーランドを訪問し、ヤブロン村に3日間滞在した。以下、そこでの観察結果、質問結果を中心に報告する。ヤブロン村はポーランド東部に位置し、ルブリンを県都とするルブリン県に属する。1918年以前はロシア領であった。”

第6章「結論」では、本研究の課題に答えると共に、地域の視点から関連資料を読み進む過程で感じた2点に触れる。その1つは、会議国家 (Congress State) という、アフリカや東南アジアの旧植民地にも通じる問題であり、他の1つは、そこから派生する国民国家 (Nation State) の意味についての疑問である。

“EU 諸国において地域研究を行う場合、国単位ではなく、ローカル毎に統計を再編し、それに基づいた方法を取っていく事が重要である。それは、歴史的な土地所有関係が大きく影響し、集落のレベルでも実際に検証した結果、その地域性の違いがはっきりとしていたことから言える。EU の地域政策において、歴史的・社会的背景を考慮せず、一律の制度を当てはめるのは非常に問題であり、非合理的ですらある。”

以上